

大阪大学に入学、進学された皆さんへ

大阪大学に入学、進学されました皆さん、おめでとうございます。

大阪大学総長として皆さんの入学、進学を心から歓迎いたします。

また、これまで長年にわたり、成長を温かく見守り、勉学を支えてこられたご家族や保護者の皆さまに、心からお喜びとお祝いを申し上げます。

本来であれば、希望に満ち輝く皆さんの瞳を見ながら、直接、語りかけたかったのですが、今年は、それが叶いません。ここに、新入生の皆さんにお伝えしたいことを記します。

新型コロナウイルス感染症（COVID - 19）による混乱が広がっています。皆さんはその状況が刻一刻と変化する中、入学試験を受け、本日を迎えるまでの間、本当に不安な日々を過ごしてこられたと思います。皆さんの中には、恩師や友人にきちんと別れのご挨拶ができていないまま、この日を迎えた方も多くおられるのではないのでしょうか。

本日、3,406名の学部学生、3,049名の大学院生の皆さんが、晴れて大阪大学の一員となり、新たな学生生活が始まりました。

皆さんは、大学で学ぶことの意義について考えたことがあるでしょうか。

私は、「世界には未だ『わからないこと』がたくさんあるのだという事実を知ること」にその意義があると思っています。

たとえば、今、社会を混乱させているウイルスは、人類の歴史と切り離すことはできないものです。有史以来、天然痘、インフルエンザなど、さまざまなウイルスとの戦いがありました。

歴史においてウイルスの存在が予測されたのは、今からわずか約130年前のことだと言われています。それまではウイルスがあまりに小さく目視できなかったため、ウイルス由来の伝染病は、空気や水そのものが原因だと解されていました。しかし、その頃はじめて、どうやら目に見えない「何か」がこれを引き起こしているのではないかと、という予測がなされたのです。その後、人類がウイルスをその目で確実にとらえるためには、1931年の電子顕微鏡の発明を待たなければなりません。この1931年は、大阪大学が大阪帝国大学として誕生した年でもあります。



豊中キャンパス 学生会館前

以来、「ウイルスがどのようにヒトの体内に侵入し、細胞の中に入り込んで増殖していくのか。体内では侵入してくるウイルスをどのように外敵と認識して、自己を守るために攻撃しているのか。」というような課題に対して、驚異的なスピードで分子生物学や免疫学が発展し、そのメカニズムが解明されてきています。

しかし、そのウイルス自体が、生物なのか、無生物なのか、生物学者の間でも、未だ定義ができていないことを皆さんはご存じでしょうか。

あるいは、情報通信技術が発達し、私たちは世界各地で起こっていることを瞬時に知ることができるようになりました。COVID-19 に関して、昨年末にはその感染症の発生をニュースで知ることができ、今日に至るまで、新しい情報が発信され続けています。しかし、これだけ情報が潤沢に存在する状況にありながら、一つの間違った情報により（それが間違った情報であると繰り返し報道されているにもかかわらず）、日本全国の小売店から、トイレットペーパーが瞬く間に消えてしまう。なぜこのようなことが起こってしまうのか、皆さんは説明できるでしょうか。

大学というのは、このような「わからないこと」を、自らが認識して、自ら探り出していく場所です。その対象は、身近な社会の出来事から、生命の歴史、宇宙の誕生、有機物の化学合成反応、脳内で行われているパルスの交換など、ありとあらゆるところで見出すことができます。

皆さんの多くはこれまで、「教科書に載っていること」を中心に学習し、知識を得てきたことと思います。そこには明確な回答がありました。しかしこれからは違います。正解のない問いを自らが自身に対して設定しなければなりません。

そのために、まず皆さんは、さまざまな「教養」を身につける必要があります。これから皆さんが「わからないこと」に出会ったときに、理性をもって対峙するための武器になるものは「教養」です。この教養は、雑学知識を得るためのものではありません。「わからないこと」に出会ったとき、教養があれば、やみくもに恐れるのではなく、正しく畏れることができます。そこから問題に対処する道が拓けていくのです。

さて、皆さんが本学での学びを実践するにあたって、一人の先輩を紹介しましょう。

本学（当時は大阪帝国大学でしたが）の理学部化学科を卒業し、サントリーの社長を長く務めた佐治敬三さんです。佐治さんは、サントリーをビール事業に進出させ、日本のウイスキーを世界に知らしめ、その独自の社風を確立しました。そして酒類業界の活性化だけでなく、我が国の文化事業にも大きな貢献をし、経営者としてのセンスが今なお語り継がれている人物です。

社員から新しい事業の提案を受けた時、佐治さんは、「なんでや？」と厳しい眼光で問いかけたといいます。それに臆することなく説明をする社員の意気込みや、きらりと光るアイデアが見えた時には、佐治さんは、にっこりと笑い、「おもしろそうやないか。やってみなはれ」という言葉を発したそうです。サントリーの社員は、この「やってみなはれ」という言葉を受けて、さまざまな事業に取り組むことができ、その積み重ねによって、今のサントリーがあります。

その「やってみなはれ」の原点は、佐治さんの学生時代にありました。本学理学部時代の指導教員であった、小竹無二雄教授は、「エトヴァス・ノイエス」（なにか新しいこと）と常に学生に発していたといいます。1940年代、第二次世界大戦の最中のことです。食料や物資の乏しい、暗雲が垂れ込める時代だったのでしょうか。皆さんと同じ世代の若者が、勉学の志半ばで、家族や友人、そして大切な夢と決別して戦場に行かなければならない。そんな時代です。しかし、その研究室では「エトヴァス・ノイエス」が一つの合言葉となり、若者たちの心に力を与え続けていたのです。

ここでいう「新しいこと」は、先ほどから申している「わからないこと」にほかなりません。研究者たるもの、教養のほかに、常に旺盛な好奇心と、飽くなき探求心、さらには繊細な感受性を有していなければなりません。

新しいものに出会ったときに得られる感動こそが、皆さんの研究を加速させるのです。そのような研究こそが、コトの本質を一つずつ解明し、そして社会に還元されてゆくのです。

本学には、「やってみなはれ」を実践することができる風が吹いています。その風をとらえるのは、皆さん自身です。あえて教員はすべてを手取り足取り教えることはしません。皆さん自身が向上心と探求心を持って、キャンパスを歩くことで、新たな出会いとともに新たな発見の息吹を感じてください。

本学は来年、「大阪大学創立 90 周年・大阪外国語大学創立 100 周年」という記念すべき年を迎えます。本年 10 月には、留学生を含めた本学学生や教職員が隣接して生活する居住空間「グローバルビレッジ津雲台」がオープンします。また来年 4 月には、外国語学部などを含む箕面キャンパスが、箕面市の粟生間谷東地区から船場東地区に移転し、我が国でも有数の都市型キャンパスとして開学する予定です。大阪大学の組織自体も「やってみなはれ」を実践していきます。

「やってみなはれ」。これは、いわば既成概念や慣習、先入観を超越する行為の時に生まれる言葉です。もちろんすべてのことが、許されるわけではありません。皆さんが学生として、そして一人の人間として、その尊厳と責任において、



佐治敬三氏 (1919-1999)
サントリーホールディングス提供

やってみたいと強く願っているとき、そしてやらなければならないと強く訴えているとき、皆さんの眼差しに本気が宿るときには、私たちはそれを全力で応援する用意があります。

本学の初代総長である、長岡半太郎先生は私たち、次のような言葉を残しています。

「勿嘗糟粕」

これは、「糟粕（そうはく）を嘗（な）むる勿（なか）れ」と読みます。糟粕とは、酒を絞り取った残りかすのことです。そのような残滓を嘗めて満足してはいけません。つまり、「常に独創的であれ」ということを私たちに伝えていきます。

私は、この言葉を唱えるたびに、本学の方向性を再認識させられ、気が引き締まります。先に紹介した、「やってみなはれ」も「エトヴァス・ノイエス」も、大阪大学だからこそ語り継がれる言葉であるのだと、私は確信しています。



長岡半太郎 初代総長
(1865-1950)

土星型原子モデル提唱などの業績を多く残した物理学者

これから始まる学生生活で、教養を学び、対処すべき課題を正しく捉え、正しく悩むセンスを身につけてください。本学は、学部生のみならず、大学院生であっても、より高い教養を身につけることのできる充実したカリキュラムを用意しています。そして教養の土台の上で、それぞれの専門性に立ち、それぞれの信念のもと、新たな出会いに驚き、喜び、一つひとつの事実の解明を進めることに躊躇しないでください。

今、この時間に、私は皆さんの顔を見ることはできませんが、皆さんが教室の片隅で、あるいは日の光が降り注ぐベンチで、目を輝かせながら、友人と語り合っている。その顔には、知的興奮を隠しきれない笑顔が満ち溢れている。そのような光景に出会える日々を楽しみにしております。

長いようで短い学生生活です。一日一日を大切に。充実した日々が過ごせますように、全力で応援いたします。

令和2年4月1日
大阪大学総長
西尾 章治郎